

## 学校において予防すべき感染症対策

2013. 2. 26

小暮 裕之

### ・ 感染経路について

空気感染：空気中に病原体が長期間浮遊し吸い込むことで感染する。

➡麻疹、水痘、結核：予防接種に勝る予防方法なし

飛沫感染：咳やくしゃみなどで1～2m程病原体が飛び感染する。

接触感染：病原体に汚染された手や皮膚などに接触することで感染する。

経口感染：口から体内に侵入し感染する。

➡咳エチケット、手洗い、うがい、換気・加湿等で予防する

※咳エチケット：①咳やくしゃみの際に口と鼻をティッシュ等で覆う

②マスク

③とっさの咳やくしゃみは袖等で覆う

④手洗い

### ・ インフルエンザ

➤ 感染経路：飛沫感染

➤ 潜伏期：2日前後

➤ 症状：全身症状（発熱、倦怠感、頭痛、体の痛み）で始まるのが特徴

➤ 診断：検査は発症翌日が正確性に優れる、問診と診察による診断（臨床診断）を優先する事がある。集団発生している時、乳幼児、妊婦、高齢者、その他慢性疾患を持っている方、重症例は早めに受診する。

➤ 治療：抗ウイルス薬（タミフル内服、リレンザ吸入、イナビル吸入）は発症48時間以内に使用すると効果あり

➤ 予防接種：ウイルスの流行は変化するため毎年必要、12月上旬までに2回目の接種を終らせる

➤ 登校基準：発症した後5日、かつ解熱した後2日（乳幼児は3日）を経過するまで出席停止

## ・ 麻疹

- 感染経路：空気感染
- 潜伏期：主に10日前後（7～18日）
- 症状：発熱、鼻水、咳、目の充血、目脂を認めながら始まり、発症3～4日後に発疹を認める。
- 診断：初期は症状とコプリック班（口腔内の所見）を参考に診断する。
- 治療：有効な治療方法なく、致死率が高い
- 予防接種：2回の予防接種が必要、①1歳 ②5～6歳（年長児）  
**2013年3月31日(間もなく終了)**まで中学1年、高校3年も対象。
- 感染拡大防止法：隔離、接触後72時間以内の予防接種で発症予防。
- 登校基準：解熱した後3日を経過し、全身状態が改善するまで

## ・ 風疹：現在都内の20～40代の男性を中心に流行中

- 感染経路：飛沫、接触感染
- 潜伏期：2～3週間
- 症状：発熱と同時期に認める発疹を3～4日認める
- 診断：初期は症状、流行状況等を参考に診断する。
- 治療：有効な治療薬なし
- 合併症：妊娠初期（特に3ヶ月まで）の妊婦が感染すると、赤ちゃんが白内障、先天性心疾患、難聴など重篤な後遺症を持つことがある。現在の流行状況より、妊娠希望の夫婦や20代以降の男性で予防接種歴が不明な場合は予防接種を勧奨する。
- 予防接種：麻疹と同様、2回の予防接種が必要。  
①1歳 ②5～6歳（年長児）  
**2013年3月31日(間もなく終了)**まで中学1年、高校3年も対象
- 感染拡大防止法：咳エチケット、手洗い励行、換気・加湿
- 登校基準：発疹が消失するまで出席停止。

## ・ 水痘

- 感染経路：空気感染
- 潜伏期：約2週間
- 症状：発疹、発熱（微熱のこともあり）

- 診断：症状より診断する。
- 治療：抗ウイルス薬、水疱がでて24時間以内の投与で軽症化する。
- 帯状疱疹：過去に水痘に感染したことがある方に、ストレスや免疫力低下等を契機に、片側の痛みや発疹を認め発症する疾患。時に帯状疱疹後神経痛として数年以上痛みが続く事もある。米国では現在60歳以上の高齢者に水痘ワクチンを帯状疱疹の予防目的に接種している。
- 予防接種：2回の予防接種が必要。①1歳 ②1歳6ヶ月～2歳
- 感染拡大防止法：隔離、接触後72時間以内の予防接種で発症予防。
- 登校基準：全ての発疹が痂皮化するまで出席停止（約1週間）

#### ・ 流行性耳下腺炎

- 感染経路：飛沫感染、接触感染
- 潜伏期：主に16～18日（12～25日）
- 症状：発熱、耳下腺の痛みや腫れ
- 合併症：髄膜炎2%、精巣炎→不妊の原因（思春期以降は20%）、難聴0.1%
- 診断：症状より診断する。
- 治療：有効な治療薬なし
- 予防接種：麻疹や風疹と同様、2回の予防接種が必要  
①1歳 ②5～6歳（年長児）
- 感染拡大防止法：咳エチケット、手洗い励行、換気・加湿
- 登校基準：発症5日を経過し、全身状態が改善するまで

#### ・ **Take Home Message**

- ・ 咳エチケットの方法
- ・ 空気感染の3疾病：麻疹、水痘、結核
- ・ 予防接種
- 麻疹・風疹（MR）ワクチン2回の接種歴を確認  
（2013年3月31日までの対象者あり）
- 水痘、おたふくかぜワクチンも2回必要